文部科学省委託事業

平成 26 年度 総合的な教師力向上のための調査研究事業

成果報告書

よこはま教師塾「アイ・カレッジ」

教員としての資質・能力を育成するシラバスの在り方

平成 27 年３月

横浜市教育委員会

目　次

Ⅰ　調査研究の概要・・・P. 1
1　調査研究の背景

2　調査研究の目的と内容

Ⅱ　卒塾生への調査・・・P. 5
1　配属校へのヒアリング調査及び授業参観

2　配属校の管理職への卒塾生状況調査

Ⅲ　シラバスの検証・・・P.11
1　平成 25 年度シラバスの検証

2　平成 26 年度シラバスの重点取組

Ⅳ　教師塾及び大学等の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.16
1　調査の概要

2　調査を通して得られた知見

Ⅴ　有識者へのヒアリング調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.19
1　調査の概要

2　調査を通して得られた知見

Ⅵ　総合的な考察と提案・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.21
1　検証を通して明らかになったアイ・カレッジの特徴

2　新しいシラバスの提案

資料編・・・P.24
○平成 26 年度シラバス（年間計画を抜粋）
○平成 24 年度よこはま教師塾「アイ・カレッジ」卒塾者についてのアンケート調査（平成 26 年 3 月実施）

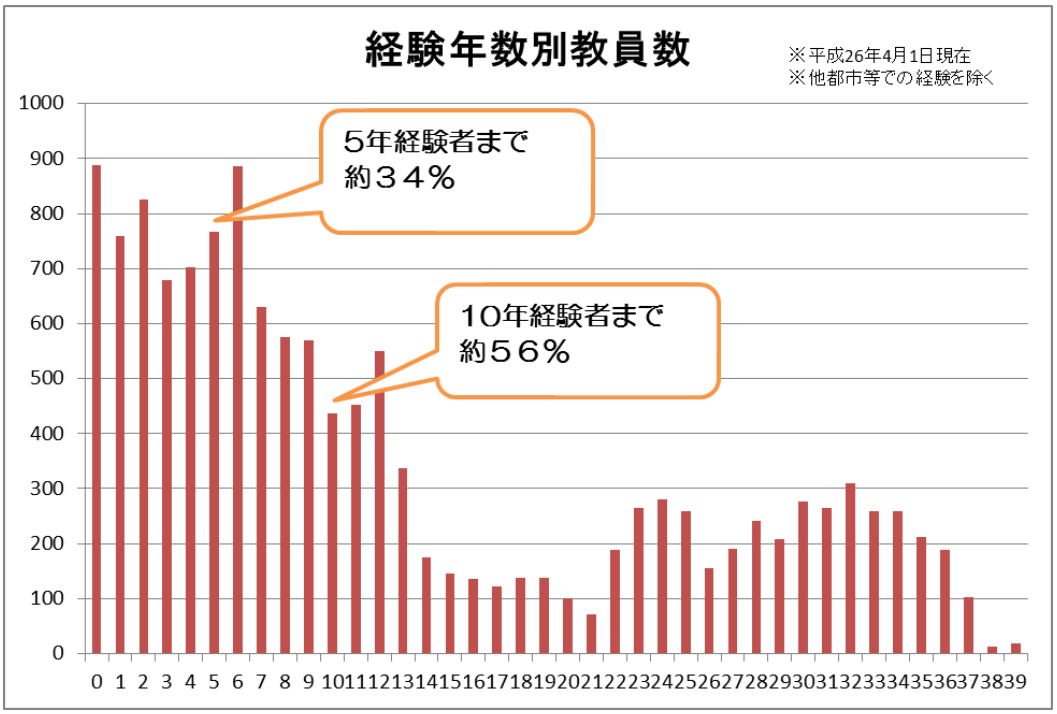
Ⅰ　調査研究の概要

１　調査研究の背景

(1) 現在の横浜市の教員養成・育成の課題

現在、横浜市の公立学校（小・中・高・特支）には基礎自治体として最大規模のおよそ 27 万６千人の児童生徒が在籍し、500 を超える学校で日々教育活動を行っている。学校を取り巻く課題は年々増え、複雑化している。さらに、社会のグローバル化が加速する中で、市民の教育へのニーズや学校への期待も多様化している。このため、これからの学校は、児童生徒の新たな学びに対応するとともに、複雑かつ多様な課題に対応することが求められる。

一方、下の図１のとおり、横浜市では教職員の大量退職、大量採用がここ 10 年続いており、現在５年経験までの教員が約 34%、10 年経験までの教員が約 56%と経験の浅い教員の割合が非常に高くなっている。そのような現状において、今後、幅広い視野をもち、実践的な指導力や学び続ける意識をもった人材の育成が大きな課題である。今後は教員の養成・育成の在り方について、より組織的・目的的・計画的に取り組むことが重要であろう。



（平成 26 年　横浜市教育委員会調べ）

図１　平成 26 年度　横浜市の経験年数別教員数

(2) 横浜市の求める教師像

横浜市では、学習指導力をはじめ、協調性や社会性、豊かなコミュニケーション力などをもった教員を求めている。平成 26 年度実施の横浜市教員採用試験案内には横浜市の求める教師像として「横浜を愛し、豊かな人間性・社会性をもつ教師」「教育に情熱をもち、常に自己研鑽に努める教師」「子どもとの関わりを大切にし、授業で勝負する教師」の３つの姿を示している。

また、平成26年３月に横浜市教育委員会で策定した「横浜型育ち続ける学校　校内人材育成の鍵 ガイド編」の中で「教職員のキャリアステージにおける人材育成指標」を示し、「横浜市が求める着任時の姿」として19の姿を表すとともに[1]、教職員に求められる資質・能力について、キャリアごとに第１ステージから第３ステージまでの３つのステージで具体的な姿を示した（図２）。

よこはま教師塾「アイ・カレッジ」（以下、「アイ・カレッジ」）では、この人材育成指標との関連を図りながらシラバスを構成し、教員として求められる資質・能力の養成を目指している。

(3) よこはま教師塾「アイ・カレッジ」の目的、概要

横浜市では優れた人材確保の視点から、平成 19 年度から「よこはま教師塾」を実施してきた。また、平成23年度からは募集区分をそれまでの小学校から広げ、小学校、中学校・高等学校、特別支援学校の志望者まで拡大するとともに、開塾の期間も10月から翌年６月までの９か月間に変更する等、より多くの受講者を受入れる体制を整え、アイ・カレッジとして新たにスタートさせた。

アイ・カレッジの目標（平成27年度募集要項から）

よこはま教師塾「アイ・カレッジ」（以下、アイ・カレッジ）では、教育への情熱と豊かな人間性・社会性を自ら高められる教師、子どもとの関わりを大切にする教師、今日の教育的課題を的確に捉え、対応できる教師の養成を目指します。

ア　平成26年度アイ・カレッジの概要

(ｱ) 開催時期

平成26年10月18日（土）～平成27年６月27日（土）までの９か月間

原則毎週土曜日に講座を実施（全35回予定…Ⅰ期　11回、Ⅱ期　11回、Ⅲ期　13回）

＊宿泊集中講座… 平成26年11月８日（土）・　９日（日）

(ｲ) 募集校種及び募集人数

本市立小学校、中学校・高等学校、特別支援学校の教員を目指す者　150名程度

※うち中学校・高等学校については、数学・理科各15名程度でその他の教科は若干名

(ｳ) 入塾選考

第一次入塾選考試験日　…　平成26年７月26日（土）　書類審査及び論文

第二次入塾選考試験日　…　平成26年９月６日（土）、13日（土）２日間　個人面接

最 終 合 格 発 表 日　…　平成26年９月30日（火）

(ｴ) 受講料等の費用

30,000円（償還なし）、その他、交通費、教材費、宿泊集中講座等の諸経費は自己負担

(ｵ) 横浜市教員採用候補者選考試験について

平成27年度実施の教員採用候補者選考試験を受験

・卒塾を条件に「よこはま教師塾『アイ・カレッジ』特別選考」での受験

[1] 平成26年　横浜市教育委員会「横浜型育ち続ける学校 校内人材育成の鍵 ガイド編」
http://www.edu.city.yokohama.jp/tr/ky/k-center/index.htm

横浜市教育委員会事務局

【教職員のキャリアステージにおける人材育成指標】

平成22年2月策定
平成26年3月改訂

資質能力			ステージ	横浜市が求める着任時の姿	第１ステージ 実践力を磨き 教職の基盤を固める 〈学級・担当教科等〉	第２ステージ 専門性を高め グループのリーダーとして推進力を発揮する 〈学年・分掌等〉	第３ステージ 豊富な経験を生かし 広い視野で組織的な運営を行う 〈学校全体〉
学び続ける教職員	教職の素養	自己研鑽･探究心		・常に自己研鑽に努め、探究心をもって自主的に学び続ける。			
		情熱･教育的愛情		・横浜を愛し、教職への誇りと強い情熱、児童生徒への愛情をもつ。			
		使命感・責任感		・教育公務員として、自己の崇高な使命を深く自覚し、法令及び「横浜市公立学校教職員行動基準」を遵守する。			
		人間性・社会性		・豊かな人間性と広い視野をもち、児童生徒や教職員・保護者・地域等との信頼関係を構築する。			
		コミュニケーション		・自分の考えを適切に伝えるとともに、周囲の状況や相手の思いを汲み取り、積極的に助け合い支え合う。			
	教職専門性	児童生徒指導	児童生徒理解	・児童生徒理解の意義や重要性を理解し、一人ひとりに積極的に向き合おうとしている。	・一人ひとりの背景を意識して、児童生徒に向き合う。	・児童生徒を取り巻く環境を的確に捉え、一人ひとりの理解を図る。	・教職員相互で共通理解を図ることができるように、組織の環境を整える。
			児童生徒指導	・個や集団を指導するための手立てを理解し、実践しようとしている。	・保護者等の関係者や校内組織と連携しながら、個や場面に応じた指導を行う。	・関係機関等と連携して、学年全体の児童生徒指導を行う。	・様々な関係機関等と連携して環境を整え、適切な指導を推進する。
		授業力	実態把握と目標の明確化（ＰＬＡＮ）	・学習指導要領を理解し、児童生徒の実態把握の必要性を認識し、目標を明確にして立案しようとしている。	・学習指導要領等を理解し、児童生徒の実態を把握したうえで目標を明確にする。	・学校の特色を考慮し、実現した姿を想定して目標を明確にする。	・地域の特色も考慮した実態把握を行い、各教科の目標設定に生かすための発信を行う。
			指導と評価の計画立案（ＰＬＡＮ）	・評価全般の意義及び、評価規準、指導・評価計画の意味を理解し、立案しようとしている。	・評価の目的を理解し、指導と評価の計画を立てる。	・目標を実現するために、効果的な評価機会を設定し、計画を立てる。	・校内の指導と評価の計画を把握し、的確な支援を行う。
			指導技術、指導形態の工夫（ＰＬＡＮ）	・板書や発問等の基本的な指導技術を身に付け、実践しようとしている。	・「習得・活用・探究」の学習を重視し、学び合い等の場面を取り入れた授業の展開を計画する。	・身に付けた技術を生かし、思考力・判断力・表現力や意欲をさらに高める工夫をする。	・個や集団に応じた効果的な指導方法を工夫・選択し、発信を行う。
			授業中の指導と評価（ＤＯ）	・「指導と評価の一体化」の意味を理解し、児童生徒の様子を把握しながら授業を実践しようとしている。	・集団の中の一人ひとりの学習状況を把握し、適切に指導・助言を行う。	・学習状況に応じて、適切に補充的・発展的な指導・助言を行う。	・学習状況を適切に評価し、状況に応じた効果的な指導方法で実践するとともに発信を行う。
			省察及び改善（ＣＨＥＣＫ，ＡＣＴＩＯＮ）	・授業改善の意義や授業を分析し改善する手立てを理解し、実践しようとしている。	・一人ひとりの学習状況を把握し、次時や次単元の指導に生かす。	・適切な授業評価を行い、継続的な授業改善に取り組むとともに自己の専門性向上に努める。	・自校の授業力向上に向けた取組の課題を明らかにし、年間指導計画等の改善を行う。
			研究の推進と研究体制構築	・研究会や研修会に積極的に参加する意義を理解し、実践しようとしている。	・校内研究会や他校の授業研究会に積極的に参加し、授業に生かす。	・校内研究会・校外研修会の企画・運営に携わり、授業力・マネジメント力の向上を図る。	・研修会で得た情報や自らの実践を広く情報発信して、自校の教育活動に生かす。
		マネジメント力	学級経営・学校経営ビジョンの構築	・学級担任の役割と職務内容及び、学校組織・運営や校務分掌を理解し、自分にできることを実践しようとしている。	・学校教育目標を理解し、学級経営や教科経営の方針を立て、一貫性のある指導を行う。	・組織運営や教科経営に積極的に関わり、学校教育目標の実現に向けて工夫改善を行う。	・学校運営について創造的なビジョンの構想やプランの構築に参画し、教育活動を活性化させる。
			人材育成（メンター チーム等の活動）	・学び続けることの意義を理解し、アドバイスに耳を傾け、自らを改善しようとしている。	・疑問点や悩みを相談したり、共有し合ったりしながら、自らの実践力を磨く。	・互いの課題や悩みに気付き、支え合える環境をつくるとともに、経験の浅い教職員を積極的に支援する。	・人材育成の重要性をふまえ、教職員の経験に応じた効果的な人材育成の環境をつくる。
			資源（人・もの・情報・時間・資金等）の活用	・学校内外の資源の種類やその活用の目的・意義を理解し、実践しようとしている。	・身の回りの資源を積極的に教育活動に生かす。	・教育活動に効果的な資源を見極めて活用する。	・状況や課題にふさわしい活用方法を考え、教育活動全体の充実を図る。
			危機管理	・危機管理の重要性を理解し、危機を察知した場合に、素早い行動をとろうとしている。	・安全や教育効果に配慮した環境を整備し、課題について「報告・連絡・相談」を確実に行う。	・危機を予測し連携して未然防止を図るとともに、早期発見、早期対応に努める。	・平常時の未然防止、抜本的改善、再発防止を組織的に推進する。
		連携・協働力	同僚とチームでの対応	・組織の一員としての自分の役割を理解し、同僚と協力して対応しようとしている。	・組織の一員として教職員と積極的に関わり、求められている役割を理解して対応する。	・互いのよさを認め合い、それぞれの力を生かして対応する。	・組織の特性をふまえ、広い視野をもって対応力を高める。
			保護者や他の組織等との連携・協働	・保護者連携の重要性を理解し、保護者や地域と積極的に関わろうとしている。	・保護者、地域と積極的に関わり、連携・協働して対応する。	・保護者、地域、関係機関との関わりを深め、連携・協働して対応する。	・保護者、地域、関係機関との連携・協働のネットワークを形成する。

図２　教職員のキャリアステージにおける人材育成指標

・卒塾時の総合評価により、成績優秀者は第一次試験免除

・第二次試験からは、他の受験者と同じ試験を受験

(ｶ)「アイ・カレッジ」講座のシラバス

開講期間の９カ月間をⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期に分けて、それぞれの期の学びのねらいを定めたシラバスで実施している。講座の総時間数は 250 時間を超える。

自覚醸成期	Ⅰ期　10 月～12 月	教員としての心構えや社会人基礎力の充実、横浜の教育、横浜の子どもについて理解を深める。
基礎力養成期	Ⅱ期　１月　～　３月	教師として高めたい能力や課題を把握するとともに、学校での授業参観や学校行事への参加、講義の受講を通して授業・学級経営に関する力を身に付ける。
実践力養成期	Ⅲ期　４月　～　６月	今日的な教育の諸課題への解決や多様な教育的ニーズに対する実践力を身に付ける。

イ　これまでの教師塾卒塾者の横浜市教員採用実績

平成 19 年から開講したよこはま教師塾は、４期以降に閉講した期間を除き、これまで通算６期の卒塾生を輩出してきた。これまで卒塾した 572 名の塾生の内、431 名が横浜市の教員として採用されている。卒塾者に対する横浜市の教員採用率は約 75％である（表１）。

表１　これまでの横浜市教員採用者数一覧

（第１期生から第４期生まではよこはま教師塾、平成２３年からアイ・カレッジ）

	累計	第1期生	第2期生	第3期生	第4期生	H23ｱｲ･ｶﾚｯｼﾞ	H24ｱｲ･ｶﾚｯｼﾞ
		H19.1～H20.3	H20.4～H21.3	H21.4～H22.3	H22.4～H23.3	H23.10～H24.6	H24.10～H25.6
入塾者	685	106	104	103	94	92	100
卒塾者	572	94	99	89	42	82	88
採用試験合格者	490	102	99	91	42	53	61
採用者	431	H20年度	H21年度	H22年度	H23年度	H25年度	H26年度
		91	99	89	42	52	58

※第1～4期生までは、小学校の教員志望者を対象に実施

※第1～4期生までは、育成期間内において、教員採用選考試験に合格できない者は退塾となった。

２　調査研究の目的と内容と内容

(1) 調査研究の目的

本調査研究の目的は次のとおりである。

○　これまで実施してきたアイ・カレッジのシラバスについて、アンケート調査の分析などを通して成果と課題を明らかにする。

○　先進的な取組を行っている教師塾と教員養成系大学の視察や有識者によるヒアリング調査を通して、教員としての資質・能力を身に付けるシラバスの在り方について検証し、新しいシラバスを提案する。

(2) 調査研究の内容

ア　卒塾生への調査

横浜市に正規採用された卒塾者に対し、授業観察や所属校の管理職へのヒアリング及びアンケート調査などを実施し、アイ・カレッジでの学びの効果を分析する。

イ　シラバスの検証

アイ・カレッジの受講者に対し、シラバスについて質問紙調査を行い、その回答を分析することで講座の効果を明らかにするとともに、改善の方向性を示す。

ウ　先進的な取組を行っている教師塾及び教員養成系大学の視察

先進的な取組を行っている教師塾や教員養成系大学の視察を行い、シラバスの共通事項や特徴などを検証し、効果的な教員養成の取組や方法について明らかにする。

エ　有識者へのヒアリング調査

これまでアイ・カレッジで講師等で関わっていただいた２名の有識者からヒアリングを行い、教師塾に求められる役割や今後の展望等ついて整理する。

Ⅱ　卒塾生への調査

１　配属校へのヒアリング調査及び授業参観

(1) 調査の概要

平成 26 年度に横浜市の正規教員となった卒塾生は 58 名（小学校 42 名、中学校 13 名、特別支援学校３名）である。その全ての教員に対し、指導主事・指導教官による学校訪問、授業参観及び管理職へのヒアリングを行った。

(2) 調査の結果

学級経営や授業実践に対する向上心が高く、自らを高めていこうとする姿勢が見られる

・学級経営や授業実践について、意図的・計画的に取り組んでいこうとする姿が見られる。また、先輩からの声に真摯に耳を傾け、多くのことを吸収していこうとする姿が見られた。

・教室環境を整え、掲示物や学習成果物などにも児童生徒の学びを視覚化する工夫が見られた。
・声の大きさも十分で、丁寧で読みやすい板書を心がけている。
・授業研究会やメンターチーム等にも進んで参加し、真摯に学んでいる。
・授業研究会の機会には積極的に授業者として実践し、力量向上につなげている。
・見通しをもって、教育活動に取り組んでいる。

児童生徒との関わりができている

・児童との信頼関係を築いている。
・児童に寄り添った話し方と、全体指導をする時のメリハリができている。
・休み時間に子どもとよく遊んでいる。
・どの児童にも明るく穏やかに接し、安心感を与えている。
・傾聴の姿勢で子どもの発言にうなずくなど、穏やかな雰囲気で子ども一人ひとりと関わろうとしている。

社会人としてのマナーを身に付け、周囲とのコミュニケーションを円滑に行うことができている。

・身だしなみや服装などにも気を付け、同僚や先輩との関わりの中で業務理解が進んでいる。
・決められたことだけでなく、先を見通して物事に取り組んでいこうとする姿が見られる。
・周りの職員からよく、声をかけられるなど良好な関係を築いている。
・先輩教員から好かれている。
・先輩から学ぼうという姿勢があり、学年内でもよく話し合っている。
・職員同士でレクリエーションを行う等、コミュニケーション向上が図られている。

困っていることを抱え込んでしまう場合がある。

・時々一人で黙って仕事をしていることがあり、心配になることがある。
・先輩や同僚から指導を受けた時に、落ち込んでしまうことがある。

これまでのヒアリング調査から明らかになったことは、卒塾生の学校での状況は概ね良好な状況であるということである。子どもとの関わり、業務に取り組む真摯な姿勢、授業力向上への取組、同僚や保護者とのコミュニケーション等、教員として努力している状況が分かってきている。

しかし一方で、困っていることを抱え込んでしまっている卒塾生も一部おり、学校としての期待として、さらに積極的に先輩教員とコミュニケーションをとりながら、困ったことを聞いて課題解決にあたってほしいといった声もあがっている。

また、新採用者 58 名のうち、すでに１名が進路変更していることも課題として挙げられる。今後は、卒塾生に対して経年で調査を行いさらに２年目３年目教員として、アイ・カレッジでの学びがどのように生かされていくかを引き続き調査していきたい。

２　配属校の管理職への卒塾生状況調査

(1) 調査の概要

卒塾生が平成 25 年度に初任教員として配属された学校の管理職に対し、年度末時点（平成 26 年３月)の卒塾生の業務の状況等についてアンケート調査を行った。具体的な調査項目として、子

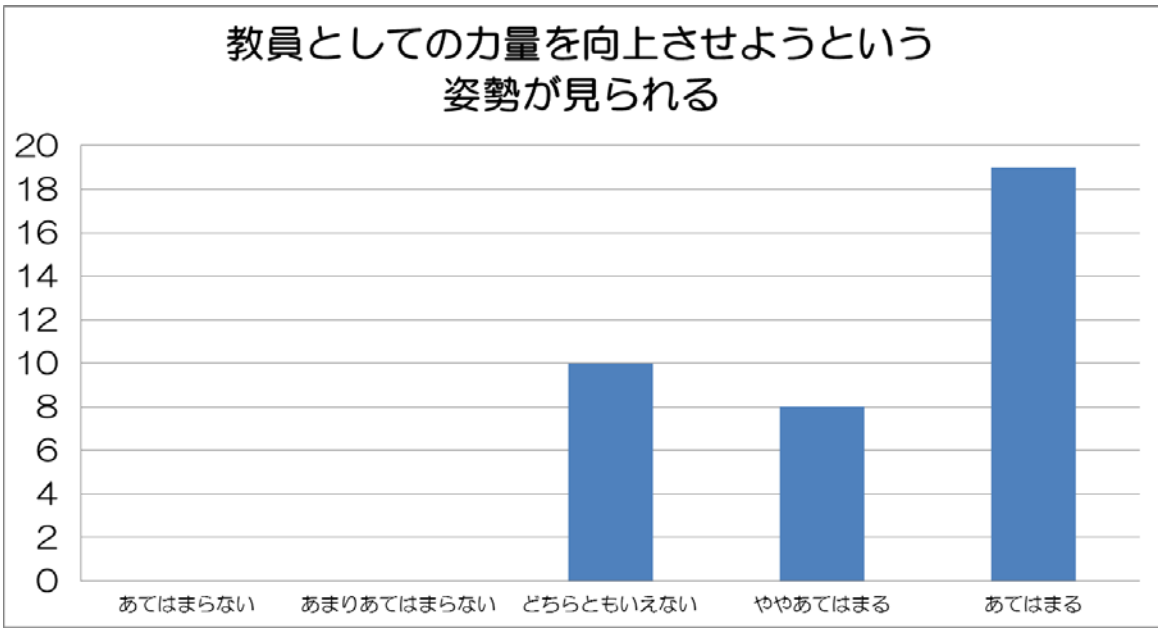
どもとの関わり方、学習指導力、教職員や保護者とのコミュニケーション等について「あてはまる」から「あてはまらない」までの５件法（あてはまる～あてはまらない）の質問紙調査として実施し、回答のあった 41 校を分析した。

(2) 調査の結果と考察

回答から得られた結果として、業務に対する姿勢、児童生徒とのコミュニケーション、同僚とのコミュニケーション等、概ね卒塾生は良好な状況にあるということが明らかになった。

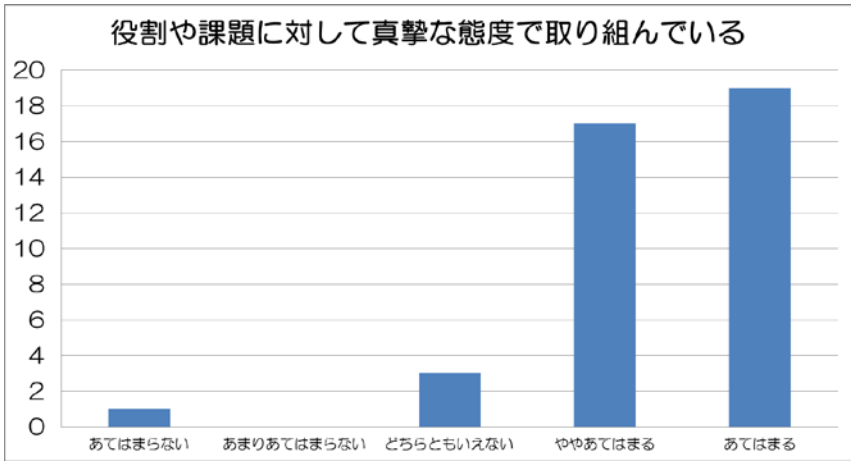
学校での状況は概ね良好である

図４、５、６、７からも分かるとおり、卒塾生の学校での状況については「仕事に対する姿勢」「役割や課題に対する姿勢」「児童生徒とのコミュニケーション」「謙虚に学び続ける姿勢」ともに概ね良好である。初任者の段階では業務上のスキルや対応力というのを高いレベルで求めることは難しいかもしれない。ただし、仕事に対する姿勢や児童生徒とのコミュニケーション力などは、教員としての資質に関わる部分であり、この項目について一定程度の評価を学校から得られているということは、今後、卒塾生が様々な資質・能力を高め、教員として成長していく姿を期待できると考える。９か月間のアイ・カレッジでの学びが生きていると考えられる。



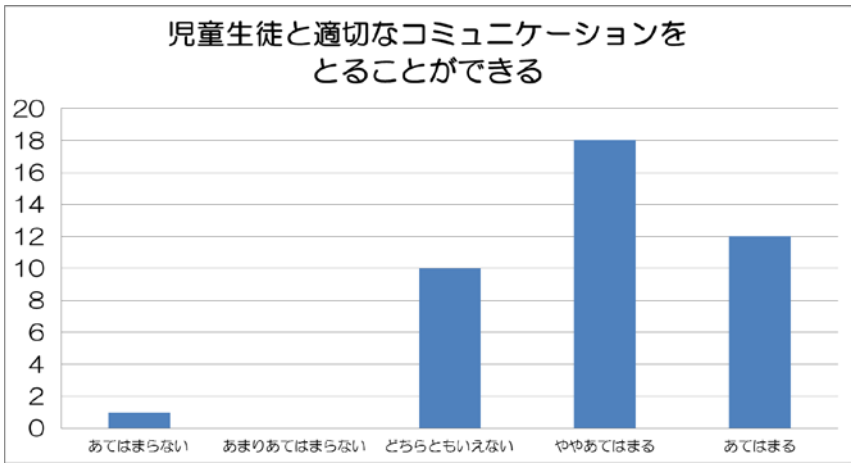
（平成 26 年 アイ・カレッジ卒塾者についてのアンケート調査における管理職回答）

図４　仕事に対する姿勢



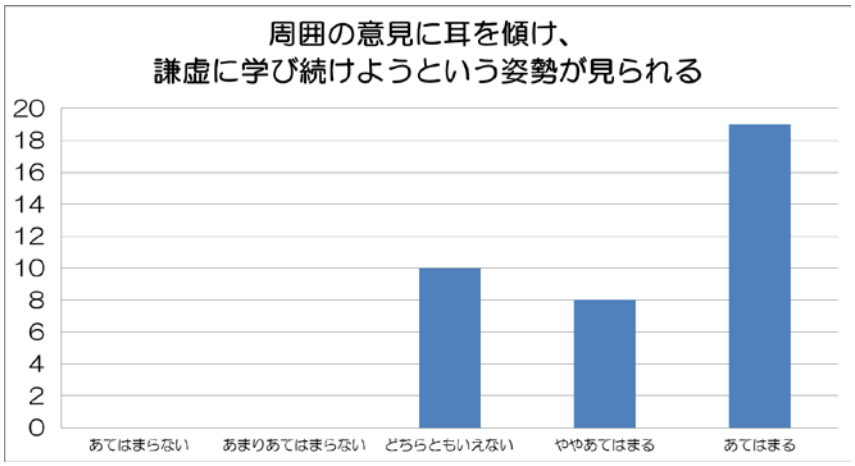
（平成 26 年 アイ・カレッジ卒塾者についてのアンケート調査における管理職回答）

図５　役割や課題に取り組む姿勢



（平成 26 年 アイ・カレッジ卒塾者についてのアンケート調査における管理職回答）

図６　児童生徒とのコミュニケーション

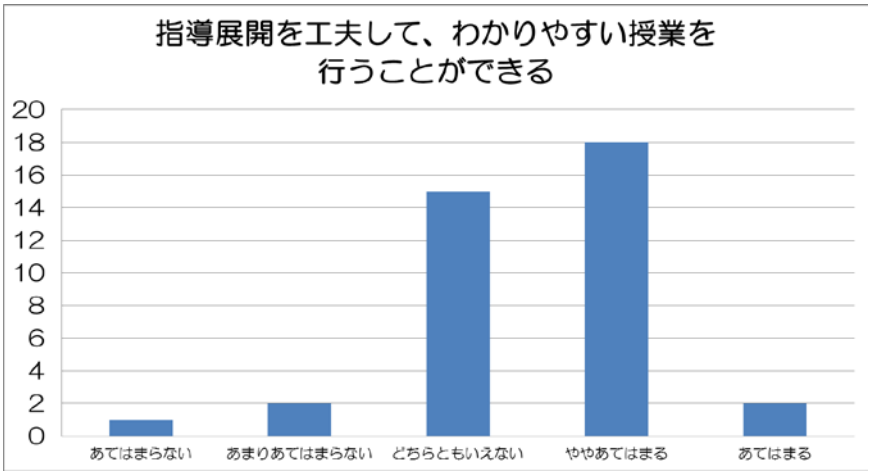


（平成 26 年 アイ・カレッジ卒塾者についてのアンケート調査における管理職回答）

図７　謙虚に学び続ける姿勢

授業力も概ね良好である

次に指導力についての結果を示す。授業力の状況を測る「指導展開を工夫して、わかりやすい授業を行うことができる」という項目の結果（図８）を見ても、卒塾生は学校から概ね良好な評価を受けている。アイ・カレッジにおいて授業力に関する講座は全体の２割を超え、最も講座時数が多い[2]。授業力基礎講座では、塾生が繰り返し学習指導案を作成したり、模擬授業を行ったりしている。また、土曜日の講座以外にも横浜市内で実施される授業参観に年３回以上参加し、レポートに取り組むなど、それぞれの塾生が自らの授業力を高める実践を繰り返し行っている。これらの講座はアイ・カレッジでも特徴的な講座である。授業力について、管理職から一定の評価を得ていることは、アイ・カレッジでの学びが教員採用後にも生きているものと考えられる。



（平成 26 年 アイ・カレッジ卒塾者についてのアンケート調査における管理職回答）

図８　分かりやすい授業

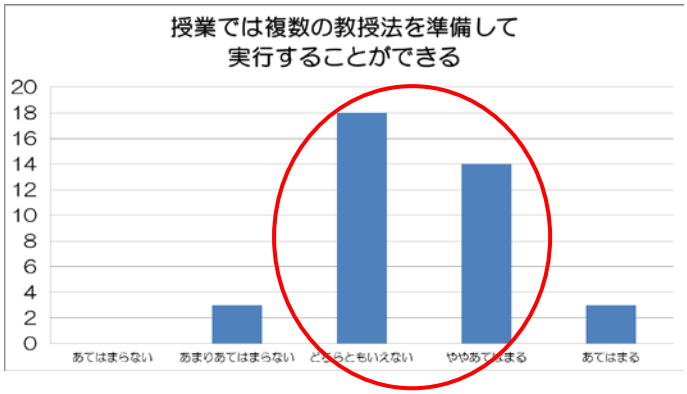
また、今回「複数の授業方法の提示」及び「学級経営力」の項目については、平成 23 年度に横浜市の全初任教員に行った意識調査[3]の結果を参考として併記した（図９、10）。この項目は本人回答（全初任教員対象）の調査であるため、今回の管理職調査と厳密に比較することはできない。ただし、他の初任者の意識調査からわかる状況と並べることで、卒塾生の授業力のレベルが決して低くはなく、初任教員時代から、ある程度の実践ができていることが読み取れるのではないかと思う。

あわせて、学級経営力についても、授業力同様の結果が見られる。授業力と学級経営力は車の両輪に例えられることもあるが、卒塾生は学級経営力についても管理力から一定の評価を得ている。

[2] 全講座数に対する授業力向上講座の割合。14 ページ参照

[3] 平成 23 年度　東京大学大学総合研究センターと横浜市教育委員会の教職員の育成に関する共同研究事業の一環として、平成 23 年度初任者研修受講者に対し、意識調査を実施した。

（卒塾生）



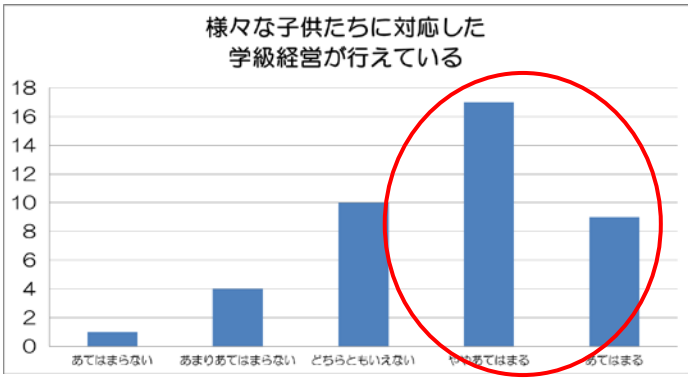
（平成 26 年 アイ・カレッジ卒塾者についてのアンケート調査における管理職回答）

（参考　初任教員）

（平成 23 年　東京大学との共同研究「初任者教員への意識調査」から）

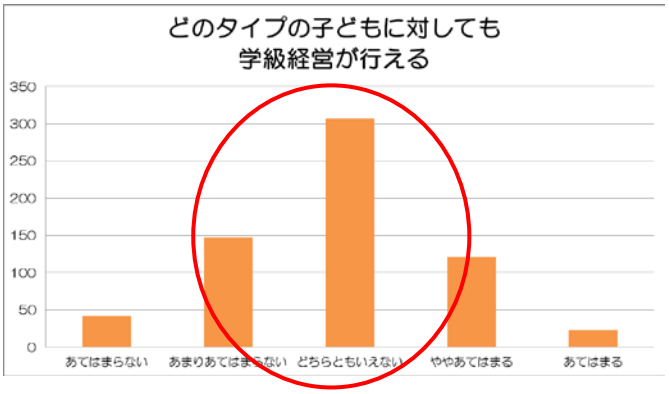
図 9　複数の教授法の提示

（卒塾生）



（平成 26 年 アイ・カレッジ卒塾者についてのアンケート調査における管理職回答）

（参考　初任教員）



（平成 23 年　東京大学との共同研究「初任者教員への意識調査」から）

図 10　学級経営力

このことから、卒塾生の状況については概ね良好な状況にあることがわかる。課題としては、少数とはいえ、学校において児童生徒とのコミュニケーション、授業力、学級経営力について困難な状況にある卒塾生がいることである。今後も調査を続け、経年の変化を確認する[4]など、シラバスを検証・改善する機会としたい。

[4] 横浜市では初任教員に対し、3 年間で教職の土台を育成する横浜型初任者育成研修を実施している。

Ⅲ　シラバスの検証

1　平成 25 年度シラバスの検証

アイ・カレッジのシラバスは、５つの分野（図 11、表２）で 13 の講座[5]を展開している。年度が変わるごとに講座の内容や時数について修正・改善を図っている。改善の方法については、指導教官を含むスタッフによる振り返り、講師や塾生からのヒアリング、学校からの期待、横浜市の教育施策等を含めて総合的に検証し、変更を加えている。

ここでは検証する方法について１つ取り上げて示したい。塾生からのヒアリングは年３回の個人面談を含めて、通常の講座の中でも実施しているが、年度末に講座ごとの質問紙に回答をもらう形で講座の評価を行っている。これはそれぞれの講座ごとに塾生が感じた「満足度」「重要度」を「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの５件法で回答するものである[6]。

図 11 アイ・カレッジシラバスの５つの分野

この評価を行う良さは、塾生の満足度と必要度を分けて調査するために、「満足度が低い」＝「講座評価が低い」にはならないということである。例えば、文章作成力養成講座は、塾生がテーマにそって繰り返し文章を作成し、その力を高め、鍛える講座である。時に、限られた時間内に自分の考えを整理しなければならなかったり、整理できなかった部分については講座後に修正を加えて提出したりと、塾生の負担も大きく、簡単には塾生の満足度は高くならないことが考えられる。ただし、苦労して身に付けた力がその後、教員になった時に生きるだろうと塾生自身が感じていれば、「満足度」よりも「重要度」への評価が高まる可能性がある。たとえ塾生が困難に感じる講座であっても、塾生が必要だと感じる講座であれば、その価値について適切に評価を行うことが、シラバスの改善を図るために重要となる（図 12）。

表２　アイ・カレッジシラバスの５つの分野と１３の講座

分野	講座
個の力を磨く	「授業力基礎講座」「学級経営基礎講座」「コミュニケーション力向上講座」「社会人基礎力養成講座」「教育課題対応力養成講座」「教職教養基礎講座」「文章作成力養成講座」「効果測定等」
自らの体験からつなげる	「宿泊集中講座」「フィールドワーク」
学校で学ぶ・学校と学ぶ	「学校で学ぶ・学校と学ぶ」
視野を広げ、明日を拓く	「特別講座」
横浜の教育の「いま」を知る	「横浜の教育の『いま』」

[5] 具体的な講座名、コマ数については 14 ページ参照
[6] 質問紙については資料編参照

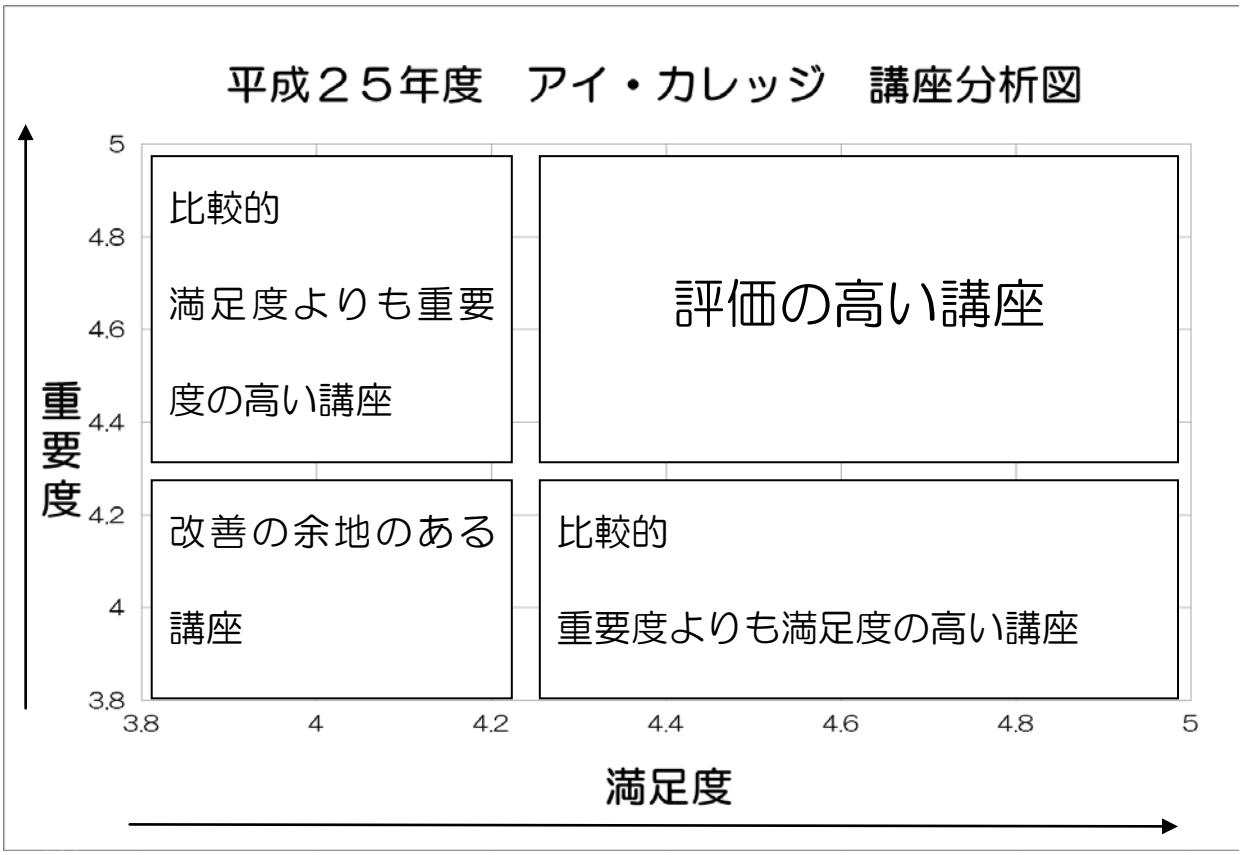


図 12　アイ・カレッジ講座分析図

※塾生がそれぞれの講座について「満足度」「重要度」を「1　全くそう思わない」から「5　とてもそう思う」までの５件法で回答した結果を図に表したもの

「満足度」「必要度」が共に高い点数を得た講座は塾生のニーズに合っている講座である。その講座については基本的には前年度の流れを踏襲し、時数を増加したり、より効果的になるような微修正を加えたりしながら、次年度も継続して実施している。一方、点数の低い講座については講座の必要性にまで戻って改善を検討し、大幅な修正を加えることもある。

平成 25 年度実施の講座の塾生評価をまとめたものが図 13 である。

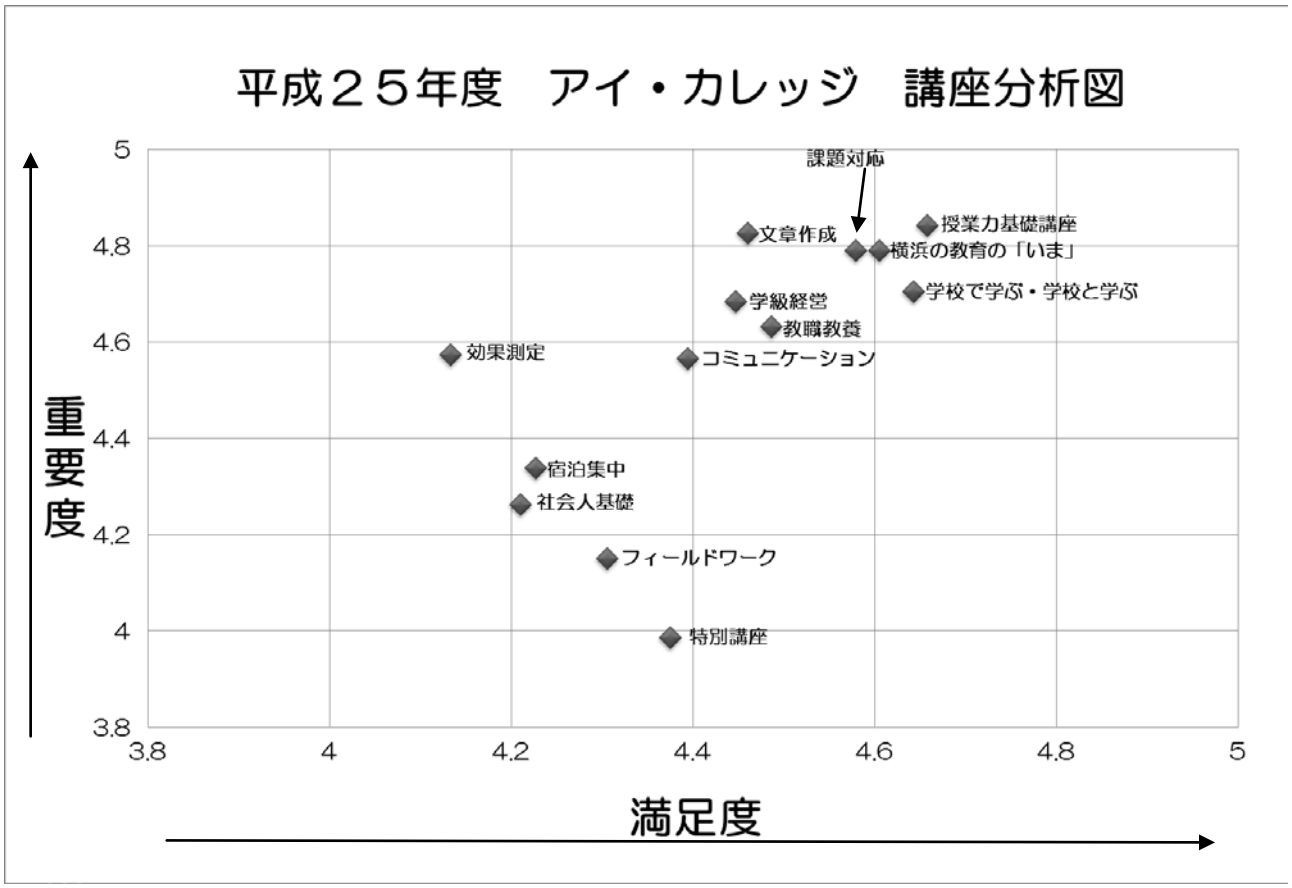


図 13　塾生が評価した講座分析図

※塾生がそれぞれの講座について「満足度」「重要度」を「1　全くそう思わない」から「5　とてもそう思う」までの５件法で回答した結果を図に表したもの

全ての講座で概ね４点以上の評価を受けているので、塾生の講座に対する重要度、満足度は概ね高いと考えられる。中でも高い評価を得ている講座は授業力基礎講座や文章作成力養成講座である。これらの講座の特徴は塾生が継続して、繰り返し実践し、指導助言を受けることができる講座である。塾生が効力感を感じることができる講座といえる。また、横浜の教育の最新事情を学ぶ「横浜の教育の「いま」」も高い評価を受けている。この講座でも一方的な講義形式の講座はほとんどない。「聞く―考える―対話する―気付く」のサイクルを大切にし、塾生が講座の中で新たな気付き、発見を行えるような工夫を行っている。

一方で、フィールドワーク、宿泊集中講座などはどちらも一定の評価を得てはいるものの、まだ改善の余地のある講座であると考えている。この講座の特徴は塾生自身が体験を通して学ぶ講座である。平成 26 年度については、この講座については結果を受け、さらに塾生が主体的に企画・運営に携わる機会を設けて、評価を高めるように企画した。

この評価マトリックスによる検証は、シラバスの改善を図る手立ての一つであるが、このような検証を重ね、平成 26 年度シラバスの重点取組を次のように設定した。

【平成２６年度アイ・カレッジシラバスの重点取組】

※実践力の向上を図るシラバス

（手立て）→①教員講師を増やし、実践的できめ細かい指導を行う
→②塾生が主体的に講座を運営したり、「教える経験」をしたりする機会を設ける
→③学校で学ぶ機会の充実

※Ⅰ期～Ⅲ期のつながりと発展

（手立て）→④全体指導から個別指導への柔軟なシフトを図る

※大学との連携の強化

（手立て）→⑤実践力の向上を図る大学と連携した講座を新規で行う。

また平成 26 年度の講座時数については、下の表３のように設定した。

表３　講座別時数

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
(1)　授業力基礎講座	31	28	28
(2)　学級経営基礎講座	4	6	6
(3)　コミュニケーション力向上講座	9	9	9
(4)　社会人基礎力養成講座	3	5	5（充実）
(5)　教育課題対応力養成講座	10	13	12
(6)　教職教養基礎講座	12	11	10
(7)　文章作成力養成講座	11	14	14（充実）
(8)　宿泊集中講座	8	8	8（改善）
(9)　フィールドワーク	8	9	8（改善）
(10) 学校で学ぶ・学校と学ぶ	1	3	5（充実）
(11) 特別講座	2	2	2
(12) 横浜の教育の「いま」	28	23	20
(13) その他、効果測定等	10	9	9
	137	140	136

※１講座は原則として 70～80 分。一部、重複する講座がある。

２　平成 26 年度シラバスの重点取組

今年度実施した５つの手立てについて、現在進行中ではあるが、ここまでの考察を行う。

(1) 教員講師を増やし、きめ細かい指導を行う

今年度、講座に招聘した教員の講師は延べ４０名である。この人数は昨年度の３２名から増加している。教員の講師を増やすことで、より学校の実際や具体的な取組について学ぶ機会が増えている。

(2) 塾生が主体的に講座を運営したり、「教える経験」をしたりする機会

宿泊集中講座、フィールドワークについて、塾生が当日に向けての準備や当日の運営に携わったり、教える経験をしたりする機会を設けた。このことで、塾生同士がコミュニケーションをよくとるようになったことや、塾生の講座への関わり方がより主体的になった。例えば、講座の準備について講座以外の時間に塾生同士で集まって議論を重ねたり、事前に下検分に行ったりする姿が見られた。宿泊集中講座の当日では互いに声を掛け合いながら、時間を有効に活用し、効果的な学びになるように活動を工夫していた。

さらに、今年度より、一日の振り返り活動（45 分）の進め方を改善し、指導教官が進行するのではなく、塾生同士で論点を定め、協議を進める形をとった。また、議論の経過は塾生同士で板書に残すなど、議論の見える化を図ることで、さらに効果的な学びの場となっている。

(3) 学校で学ぶ機会の充実

学校で学ぶ・学校と学ぶでは従来からある授業参観、宿泊行事への参加等に加え、学校で模擬授業を行う機会を充実させた。また、会場となる学校も特定の校種にならないように、小学校、中学校、特別支援学校を用意した。

そのことで、塾生が校種の違いによって教室の様子が異なることや、授業で求められる声の大きさ、目の配り方、机間巡視の時間配分等、実際の学校をイメージしながら学びを深めることができた。

(4) 全体指導から個別指導への柔軟なシフト

模擬授業や文章作成など「個の力を伸ばす」講座について、一人ひとりが複数演習を行いながら、徐々に個の力を高めている。これまでも、「講義+演習+協議」の形をとりながら、塾生同士で気付き合う場面を用意してきたが、今年度は、そのことに加えて個別指導を充実させることにした。具体的には面談の機会の充実や、課外時間に行われる相談タイムの設定である。このことで指導にあたる指導教官が塾生個人の課題を把握し、塾生の資質・能力やニーズに応じた指導を行うことが可能となった。以前より増して指導教官と塾生の関係が深まり、的確できめ細かい指導が行うことができるようになった。

(5) 大学と連携した講座

これまでも、大学から講師を招き、専門性の高い講演をいただくなど、大学と連携しながら講座

を展開してきたが、今年度の新規の企画として、フィールドワークを留学生とともに行う講座を設定した。これは今年度策定された第２期横浜市教育振興基本計画の重点取組「国際社会で活躍できる人材の育成」との連動を図った講座である。この講座については横浜国立大学の協力を得て実現に至った。これまでもフィールドワーク講座を実施してきたが、どちらかというと塾生が受け身、教わる側になる講座が多かった。そこで、塾生が留学生に外国語を含めながら教える機会を設定した。このことで、塾での学びをさらに主体的にするとともに、グローバル人材の育成に関わる教員として今後求められる資質・能力の向上にも役立つものとして期待している。（この講座については平成 27 年５月に実施予定）

Ⅳ　教師塾及び大学等の調査

１　調査の概要

アイ・カレッジの指導内容の充実と指導方法の改善を図るため、先進的な教員養成の取組を実施している７つの自治体、９つの大学等の視察を行った（表４）。

表４　教師塾及び教員養成系大学等視察一覧

訪問日時	訪問先（教師塾）	視察方法
８月 27 日	東京教師養成塾	講座見学及び説明
９月 27 日	東京教師養成塾	講座見学及び説明
12 月 15 日	石川師範塾	説明、会場見学
12 月 16 日	滋賀の教師塾	説明
１月 14 日	さがみ風っ子教師塾	説明
１月 16 日	京都市教師塾	説明
１月 16 日	京都府教師力養成講座	説明
２月２日	埼玉県教員養成セミナー	説明
訪問日時	訪問先（教員養成系大学）	視察方法
１月７日	岐阜聖徳大学	授業見学、説明
１月 28 日	上越教育大学	説明
２月９日	兵庫教育大学	授業見学、説明
２月 27 日	武庫川女子大学	説明
開催日時	参加シンポジウム	
７月２日	聖徳大学シンポジウム 「教員養成モデルカリキュラムの試行的実践と改善」	
８月 19・20 日	京都大学Ｅフォーラム　「全国スクールリーダー育成研修プログラム」	
12 月３日	秋田県立国際教養大学シンポジウム 「日本発ワールドクラスリベラルアーツカレッジへの進化」	
12 月３日	鳴門教育大学シンポジウム 「教員養成モデルカリキュラム（学士課程）の試行的実践と改善」	
２月８日	広島大学シンポジウム　「小学校初任者研修支援プログラムを開発」	

２　調査を通した得られた知見

これまでの視察を通して得られた知見はシラバス、学生・塾生支援体制、学びのツール等、多岐にわたる。ここでその全てを述べることは困難であるため、特にアイ・カレッジの充実、改善に生かせるであろう「学校で学ぶ機会の充実」と「主体的・協働的に学ぶ場の設定」の二つの視点に絞って、述べていきたい。

(1) 学校で学ぶ機会の充実

ア　教師塾で行う学校実地演習

他の自治体で実施している**ほとんどの教師塾で、学校における演習が実施されている。**例えば、相模原市が実施している「さがみ風っ子教師塾」（学生コース）では 11 月から２月の期間内に 10 日間程度の学校実習を、石川県で実施している「いしかわ師範塾」（標準コース）では 80 時間の学校実習を、京都市で実施している「京都教師塾」では必修として 10 日間の学校実習をそれぞれ課している。また、京都府で実施している「教師力養成講座」では、その志願資格として「教員養成サポートセミナー」「大学の教職インターンシップ」「10 日間以上のボランティア経験」が必要となっている。学校での演習に参加し、一定程度の実践力を身に付けた者に受講を認め、講座の中ではより教員としての資質・能力を高める内容を実施している。

一方、教師塾等に入塾する大学生にとっては、時に学校での演習の機会が**大学の授業と重なり、負担を感じている者もいる。**その負担解消の方法の一つとして、教師塾の学校実地体験に、大学で行っている学校におけるボランティア活動をとカウントできる制度を設けている自治体もある。

いずれにせよ、教師としての実践力を身に付けさせるために、自治体における教師塾等で学校での実地体験が行われていることはほぼ共通の事項といえる。

アイ・カレッジでも、これまで「学校で学ぶ・学校と学ぶ」講座の中で、優秀な教員等の授業参観をはじめ、宿泊行事への参加、学校ボランティア活動等、学校で実践力を身に付けられる講座を必修の講座として展開してきた。しかしながら、その参加日数は５日程度と他の自治体と比較しても多い日数とは言えない。また、アイ・カレッジでは様々な学校の教育活動を参観する機会には恵まれているが、一つの学校に継続して関わる機会はない。

今後、学校での経験をさらに効果的なものにするためには、**特定の学校で継続的な関わりをもつ機会が必要になると考えられる。**そのことで、これまでは教員の仕事の内容を知るということが主眼であった学校体験活動から、教員の仕事の内容を知り、体験してみるとともに、さらによい活動への高めていくという一連のプロセスを体験できることが期待できる。

イ　教員養成系大学で行われている学校での演習

これまで視察を行った多くの大学では、教育実習の法定日数以外にも学校で学ぶ機会が多く保障されていた。例えば、上越教育大学では教育実習（教育実地研究）が１年次から設定されている。内容は年次が上がっていくにつれて発展するようになっており、１年次（観察・参加実習）、２年次（介護の体験・授業基礎研究）、３年次（初等教育実習）、４年次（中等教育実習）のように定められている。他にも、90 パーセント以上の学生が学校ボランティア体験を行って

いるとのことである。また、教員就職率全国１位（91 パーセント）の兵庫教育大学では４年間で延べ100 日程度の教育実習を行う。またほとんどの学生が学校ボランティアに参加している。ボランティアの一つであるスクールサポーターは半年又は１年間の長期間、週１～２階継続して学校に関わる活動であるが、これにも多くの学生が参加しているとのことである。

これまでの視察から、教師塾、教員養成系大学ともに学校で学ぶ実地演習が多く行われているということがわかってきた。また、その内容も単に学校でのボランティアを体験させるだけでなく、意図的、計画的、継続的に実施されるようになってきている。

学校での実地体験そのものが有効であることは広く共有されているが、その体験の質を高める工夫も多くの教師塾・大学等でなされていることがわかった。

(2) 主体的・協働的に学ぶ場の設定

教員としての資質・能力を身に付けるためには、一方的に講義を聴くような受け身の講座だけでは難しい。塾生が自ら資質・能力を高めてこうとする姿勢が必要であり、その学びが主体的・協働的に行われることでさらに効果的になる。これまでの教師塾や大学の講座等の視察を通して、講座（授業）のスタイルも大きく変容してきていることがわかってきた。例えば、京都教師塾では 300 人を超える塾生が入塾し、受講しているにもかかわらず、「教育学講座」では講義だけでなく、その後に分散会での協議を組み込むなど、塾生が自分の意見を述べながら主体的に関わる場面を用意している。また、いしかわ師範塾では、講義+演習+協議のパターンを行うとともに、１グループが５人から６人の少人数グループで活動できるようになっている。

大学においても学生の意識の高め、主体的・協働的に学ぶ講座の工夫が多くみられた。それは授業のスタイルだけではなく授業時間以外にも学生が自主活動として講座を企画・運営するような機会などである。例えば兵庫教育大学では、学生が自主運営するアカデミックカフェが実施されている。これは講座に関わる講師選定、日程調整を学生が企画調整をして実施するものであり、受講を希望する学生も多いとのことである。また、ボランティアステーションではボランティア支援を学生スタッフが行っている。上越教育大学でも、平成 10 年から「学びのひろば」を導入し、学生の自主活動として児童との触れ合いを通して、子どもたちと自らの関係を構築できるような経験を行うことができる。この活動は学生たちの意見によって年々改善が加えられ、今では学生約 370 人、児童約 360 人が参加する活動へと広がっている。

アイ・カレッジでは講座時間が 250 時間を超えており、全国でも講座の時数は最大規模であろう。それらの講座についてはこれまでも、一方向の授業にはならないように工夫・改善を加えてきた。

しかし、視察を通して得た知見を加えるのなら、塾生が主体的・協働的に実施できる活動を加えることでさらにアイ・カレッジでの学びが充実したものになるのではないかと感じている。例えば、アイ・カレッジの宿泊集中講座では、これまで、しおりの作成や講座の準備等を事務局で行ってきたので、今年度から塾生主体の講座になるようなシフトを試みた。宿泊講座のしおりの

作成、全体会の進行、分科会のファシリテーション等も塾生が行い、その活動を指導教官が見守り、適切な場面で指導・助言を行う体制を整えた。結果として、教師の仕事理解につながるとともに、塾生同士のコミュニケーションが活性化し、講座により前向きに取り組む姿勢が見られた。今後もこうした場面を増やしていきたいと考えている。

Ⅴ　有識者へのヒアリング

１　調査の概要

有識者へのヒアリングとして、横浜国立大学の２名の教授からヒアリング調査を行った。この２名を選出した理由は今年度、横浜市教育委員会と横浜国立大学との間で教員養成・育成に関する協定を結んだことやこれまでのアイ・カレッジ講師の実績から教師塾の実態を知っていること、さらに、今後においても教師塾等の教員養成の在り方について総合的に有識者として指導や助言をお願いしたいこと等が挙げられる。

表５　ヒアリング調査を行った有識者

調査日時	有識者
12 月 20 日	横浜国立大学教育人間科学部　学部長　髙木 まさき 氏
11 月 29 日	横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター　教授　髙木 展郎 氏

２　調査を通して得られた知見

有識者の知見は次のとおりである。

教師塾の役割は大学と委員会をつなぐ接点である

・教師塾の役割として期待することは人間の幅を広げること。教員には専門性も大切だが、ベースとなる人間力が必要。学び続けたり、切り拓いたりする力が今後はさらに求められる。

教師塾で築いた人間関係が、その後の教員生活の心の支えになる

・教員になって、困難にぶつかった時に、多様な人間関係があった方が心の支えになる。

大学と連携することで、講座もさらに充実させることができる

・大学教員が講師として一コマ担当するのもよいが、教育委員会と大学が連携して一つの講座をつくるというのも一つの考えだと思う。例えば、授業づくりの中で、大学で学んだことが、教員としてどう具体的に生きているのかわかるような講座をつくることができれば、塾生が教科のおもしろさにも気付く機会にもなるだろう。大学の施設を使って講座を行うという工夫も考えられる。

人材育成指標と大学のスタンダード等の連動を図るとさらによい

・大学と教師塾でシラバスの位置づけを明確にすると互いのすみ分けや乗り入れが明確になる。説明もしやすくなるだろう。

「横浜」らしい講座を期待したい

・横浜でなくてはできない講座、横浜らしい講座を今後期待したい。

講座で学んで欲しいことなど

・教育史については大学によっては行っていない場合があるので、教師塾で扱う意味がある。また、教育史を踏まえることで、学力観や指導観、評価観が深まり、学校における様々な営みの意味付けや価値付けにつなげることができる。

・大学での教職課程での学習には限界がある。例えば、学習評価などについては、まだまだ深まりが必要と考えられる。そのようなことに関して、教師塾などでは、学校の実情や実態に即した指導を行うことで、大学の教職課程との差別化が図られる。

ポートフォリオの導入

・教師塾での学びのポートフォリオを作成することで、５年次研修や10年次研修に生かすことができる。実際に教員になった際、塾生のときには、分からなかったことが分かるようになったり、本質が分かり新たな意味付けや価値付けを行ったりすることがあるのではないかと考えられる。また、そのことを強化するために同窓会のようなことを行うことも考えられる。ポートフォリオを持参し、それを基にした協議などすることで、教師塾の学習を意味あるものにすることが期待できる。これからは、クラウドなど Web における環境を利活用することで、情報の共有を図ることも考えられる。

授業研究の在り方

・模擬授業において、例えば、教卓を置かない環境で行うことで、言語活動など求められている授業を促すことができる。教卓など当たり前のものがなくなることで、塾生にとっては考えるきっかけになる。自ら考えさせることで、原体験だけでなく、今求められている教育の在り方について考えさせたい。事後研究をしっかり行い、改善と充実を図ることが大切である。事後研究では、言い訳を述べるのではなく、良かった点や課題を明らかにし、改善や充実につなげることが大切である。

土曜日の開催、期間など

・学生も結構忙しい。学生の負担を考えつつ、限られた時間でも、質の高い学習ができるようにすることが大切である。

教師塾における評価・評定について

・期末ごとの振り返りは大切である。塾生への評価・評定だけでなく、期末ごとの塾生からの評

価も行い、それら基にシラバスを検討することで、今後の教師塾の運営に生かすことができる。

Ⅵ　総合的な考察と提案

1　検証を通して明らかになったアイ・カレッジの特徴

これまで、アイ・カレッジのシラバス等について、様々な角度から検証をしてきた。これらの検証から見えてきたアイ・カレッジの特徴と今後の可能性について、総合的な考察を行う。

(1) アイ・カレッジの特徴・良さ

250 時間以上を超える充実したシラバス

他の自治体と比較してみても、250 時間以上、13 講座（132 コマ）のシラバスの内容は日本でも高いレベルと言える。指導主事による講座をはじめ、宿泊集中講座、大学教授等、専門的な知見をもった外部講師による講座等、多様な講師陣と継続的な指導による充実したシラバスになっている。また、今回の調査研究によって、アイ・カレッジを卒塾した卒塾生は教員として良好な状況にあることも明らかになった。アイ・カレッジでの学びが生きているといえよう。

また、塾生の学ぶ姿勢は意欲的である。これにはアイ・カレッジの仕組みも影響を与えている。アイ・カレッジは卒塾時の成績によって、横浜市採用試験の特別選考枠で受験できたり、成績優秀者については特別選考枠で受験できたり優遇措置を設定している。逆に言うと、一定の学びの状況を達成していないと卒塾ができない。そのため、塾生は真摯な態度で塾での学びに向き合い、教員としての資質・能力を身に付けることができている。

指導教官によるきめ細かい指導

アイ・カレッジには横浜市立学校の元校長である８名の指導教官が塾生の指導にあたっている。基本として、一日に４つの講座が展開され、外部講師による講義もあるが、事前に全ての講座について指導教官は検討を重ね、塾生に対し、何をどのように指導、評価するのかといったことについて共通の理解を図って指導にあたっている。そうした事前準備を行うことで振り返り活動等の機会に、塾生の学びが深まるような指導・助言を行うことができている。

また、土曜日の講座以外にも塾生が参加する授業参観を引率し、適切な支援を行ったり、塾生が提出した課題レポートへの指導・助言のコメントを入れたりするなど、塾での学びが単発の学びにならないようにきめ細かい指導を継続している。

塾生同士が切磋琢磨する関係

アイ・カレッジに通う塾生の人数は毎年 100 名程度である。この規模は全国的にはおそらく中位程度であろう。塾生のグループは校種が混合されたＡ編成と、校種と教科別のＢ編成に分かれており、講座の内容に応じてＡ編成、Ｂ編成を柔軟に変えている。また、Ａ編成はⅠ期からⅢ期までの期ごとに変更になり、塾生同士が新しいメンバーとコミュニケーションをとることができるようにしている。

卒塾時に行う塾生の調査の中で、多く回答されるのが、「本気で教師になりたいという仲間に出会えて良かった」「真剣に仲間と学び合い、互いを高めあえた」という塾生同士の関係に関する記述である。互いに横浜市の教員を志すという一つの目的に向けて協働の学びを継続することで、塾生同士が切磋琢磨し合う関係が生まれている。

(2) 今後の課題

学校で学ぶ機会を増やす

アイ・カレッジではこれまで、「学校で学ぶ・学校と学ぶ」講座を毎年、時数を増やして内容の充実を図ってきた[7]。しかし、これまでの視察や有識者によるヒアリング等からも、学校における体験活動が教員養成で有効であることがわかってきた。他の自治体と比較しても、アイ・カレッジの講座を通して学校で学ぶ機会は少なくないとはいえ、多いとは言えない。また、アイ・カレッジでは授業参観にしても、宿泊行事への参加にしても、その活動が単発になっており、継続的な活動にはなっていない。いくつかの自治体や大学で実施されている継続して、その学校で力を身に付けるといった活動にはなっていない。今後は塾生が学校で学ぶ機会をもっと効果的な学びとなる工夫が必要であり、改善の余地がある。

塾生の状況に応じたシラバス

アイ・カレッジのシラバスは 250 時間以上ある充実したシラバスであることは前述のとおりである。一方、平成 26 年度の塾生の所属割合は学生が約 78%、臨時的任用職員・非常勤講師が約 13%である。シラバスは全ての講座に出席することを前提につくられているが、学生にとっては大学の授業が土曜日にあったり、臨時的任用職員・非常勤講師にとっては部活動指導や土曜授業があったりと、重複してしまうことでアイ・カレッジに参加できないものもいた。

アイ・カレッジの学びを継続的に積み重ねることができるように、塾生の状況に応じたシラバスの工夫が求められている。

[7] 時数の増加については 14 ページ参照

２　新しいシラバスの提案

最後に、平成 27 年度以降のアイ・カレッジのシラバスの方向性について、次の３つの提案を示す。

【新しいシラバスの提案】
①学校体験プログラムの新設
（具体例）→質の高い教師体験プログラムを提供　等

②塾生が主体的・協働的に学ぶことができる講座
（具体例）→見通し・課題解決・振り返りの流れを重視した講座
→塾生が自身の課題を発見し、探究できる講座
→塾生による企画講座の実施　等

③塾生の状況に合わせたシラバスの工夫
（具体例）→日曜日開催の実施

これまでの検証を通して、アイ・カレッジの特徴・良さと、今後の課題が見えてきた。今後の展望を含めて、５つの提言をして、調査研究のまとめとする。

⑴　学校体験プログラムの新設

塾生にとって、学校で学ぶ機会は貴重である。さらに、実践力を身に付けることを目的にするのであれば、単に学校に行って学校の教育活動に参加することで終わるのではなく、この機会を通して意図的・計画に実践力を高めていく必要がある。これまでの検証をふまえるとその中で、特に重要なのが学校で学ぶ継続性と経験の質だと考える。継続性と質を担保する新しい学校体験プログラムの開発をしていきたい。

⑵　塾生が主体的・協働的に学ぶことができる講座

これまでもアイ・カレッジでは講義を一方的に聞くという講座ではなく、「講義→協議→振り返り」というプロセスを重視し、塾生同士で話し合い、考えたり気付いたりする場面を多く設定してきた。本調査研究を通して、それに加えて塾生が主体的・協働的に課題解決に向かうような講座を追加することで、より効果的な学びになるのではないかと考える。塾生が自らの課題を発見し、その課題に向けて探究的に課題解決に向かうような講座になれば、より「学び続ける教職員」として必要な資質・能力の向上につながるであろう。

⑶　塾生の状況に合わせたシラバスの工夫

アイ・カレッジに入塾を希望する者には学生、社会人、臨時的任用職員・非常勤講師等、様々な所属があり、背景がある。そうした様々な背景をもった方々が「横浜市の教員になりたい」という一つの志で集うところにアイ・カレッジの良さがある。アイ・カレッジでの学びが充実すればするほど、時に塾生が負担に感じる場面も出てくるであろう。そうした塾生の負担を考慮し、学びたい時に学ぶことができるシラバスの在り方も検討していく必要ではないかと考える。

Ⅶ　資料編

平成２６年度　よこはま教師塾「アイ・カレッジ」シラバス（年間計画を抜粋）

回	月	日	曜	AMPM	講座名	講座のねらい
1	10月	18	土	ＡＭ	入塾式	○入塾にあたり、塾生としての心構えを確かにする。
					横浜の教育「いま」① 塾での学びのガイダンス	○一年間の講座の概要や規則等について知り、塾での学びに見通しをもつ。
				ＰＭ	宿泊集中講座 オリエンテーション	○宿泊集中講座のねらいと進め方を知り、見通しをもつ。
					コミュニケーション力向上講座① 自己紹介・他己紹介	○講座のねらいと進め方を知り、見通しをもつ。自己紹介・他己紹介を通して自身のコミュニケーションの在り方をみつめる。
2	10月	25	土	ＡＭ	社会人基礎力養成講座① 社会人としてのマナー	○社会人として必要なマナー（身だしなみ、振る舞い、敬語等）を知り、演習を通して身に付ける。
					横浜の教育の「いま」② 児童生徒と過ごすこと	○自らの人権意識を問い直し、教師になって必要な人権感覚について考える。
				ＰＭ	横浜の教育の「いま」③ 横浜の教育が目指す方向	○横浜市教育振興基本計画の概要と今の横浜市の学校教育の現状・特徴を知る。
					コミュニケーション力向上講座② 聴くこと	○聴き方が話し手に与える影響を体験的に学び、自己の聴く姿勢・態度を振り返り、改善につなげる。
3	11月	1	土	ＡＭ	横浜の教育の「いま」④ 健やかな体の育成	○健やかな体の育成に向けた横浜の子どもたちの現状と学校の取組について知る。
					授業力基礎講座① 授業づくりの基本的な事柄	○授業のねらいと進め方を知り、見通しをもつ。 ○授業づくりの基本的な事柄を理解する。
				ＰＭ	学校で学ぶ・学校と学ぶ 教育活動に参加することのねらいと進め方	○学校の教育活動に参加することのねらいと進め方を知る。配慮することを理解する。
					横浜の教育の「いま」⑤ 豊かな心の育成	○「『豊かな心の育成』推進プログラム」を策定したねらいと概要について知る。
4	11月	8	土	ＡＭ	宿泊集中講座 バス内講座	○集団生活を通して、教員に求められるコミュニケーション力を養い、塾生同士の関係を深めるとともに、実践的指導力の向上を図る。
					宿泊集中講座 開講式、集団訓練	○集団生活を通して、教員に求められるコミュニケーション力を養い、塾生同士の関係を深めるとともに、実践的指導力の向上を図る。
				ＰＭ	宿泊集中講座 自然体験、レクリエーション	○集団生活を通して、教員に求められるコミュニケーション力を養い、塾生同士の関係を深めるとともに、実践的指導力の向上を図る。
					宿泊集中講座 カレーづくり、課題講座	○集団生活を通して、教員に求められるコミュニケーション力を養い、塾生同士の関係を深めるとともに、実践的指導力の向上を図る。
5	11月	9	日	ＡＭ	宿泊集中講座 講話	○集団生活を通して、教員に求められるコミュニケーション力を養い、塾生同士の関係を深めるとともに、実践的指導力の向上を図る。
					宿泊集中講座 バス内講座	○集団生活を通して、教員に求められるコミュニケーション力を養い、塾生同士の関係を深めるとともに、実践的指導力の向上を図る。

平成２６年度　よこはま教師塾「アイ・カレッジ」シラバス（年間計画を抜粋）

回	月	日	曜	AMPM	講座名	講座のねらい
6	11月	15	土	ＡＭ	宿泊集中講座 振り返り	○宿泊集中講座を振り返り、成果と課題を明らかにし、今後の学びに生かす。
					授業力基礎講座② 「道徳の時間」の授業づくり	○「道徳の時間」の考え方と授業の基本的な在り方を理解する。
				ＰＭ	授業力基礎講座③ 「道徳の時間」の指導案作成	○「道徳の時間」の学習の進め方を理解し、指導案を作成する。
					コミュニケーション力向上講座③ コミュニケーション力を高める１	○演習を通して、よりよい人間関係を築くための豊かなコミュニケーション力を身に付ける。
7	11月	22	土	ＡＭ	社会人基礎力養成講座② ホスピタリティ	○ホスピタリティの考え方を知り、子ども、保護者、同僚との関係づくりに生かす手法を演習を通して身に付ける。
					学級経営基礎講座① 学級づくりの基本的な事柄	○学級経営基礎講座のねらいと進め方を知り、見通しをもつ。 ○学級づくりの基本的な事柄を知る。
				ＰＭ	授業力基礎講座④ 模擬授業「道徳の時間」	○持参した「道徳の時間」の指導案を基に、数名が模擬授業を行い、協議を通して、道徳の授業の在り方を理解する。
					教育課題対応力養成講座① 児童生徒への対応(1)	○場面模擬対応のねらいと進め方を知り、今後の見通しをもつ。 ○体験を通して課題をもつ。
8	11月	29	土	ＡＭ	横浜の教育の「いま」⑥ 特別支援教育の推進(1)	○特別支援学校の教育活動の概要と実際を知る。
					文章作成力養成講座① 文章作成の基本的な事柄	○学校で作成する文章について知る。わかりやすく、論理的な文章を作成するための基本的な事柄について理解する。
				ＰＭ	教職教養基礎講座① 身に付けたい力を明確にした授業	○学習指導要領の変遷の概要を理解し、今求められる学力について考え、模擬授業等に生かす。
					学級経営基礎講座② 学級づくりアイデア	○学級づくりにおける目指す集団や子供像等について協議し、理解を深める。
9	12月	6	土	ＡＭ	教職教養基礎講座② 習得と活用を通して学力を高める	○習得と活用の側面から、学力を高める授業のポイントについて具体的事例を通して理解を深め、模擬授業等に生かす。
					文章作成力養成講座② 検討　文章の構造	○互いの文章を持ち寄り、構造や課題把握に着目しながら検討し、自己の課題を明らかにする。
				ＰＭ	教育課題対応力養成講座② 児童生徒への対応(2)	○場面模擬対応を行い、基本的な対応の仕方を身に付ける。
					コミュニケーション力向上講座④ コミュニケーション力を高める２	○演習を通して、よりよい人間関係を築くための豊かなコミュニケーション力を身に付ける。
10	12月	13	土	ＡＭ	著名人講座	○夢を実現するために必要なことについて考える機会とする。
					著名人講座	○夢を実現するために必要なことについて考える機会とする。
				ＰＭ	学級経営基礎講座③ 学級はじめの模擬授業	○学級はじめを想定した模擬授業「学級経営で大切にしたいことと取組」を行い、学級づくりへの理解を深める。
					横浜の教育の「いま」⑦ 卒塾生に学ぶ	○卒塾生から学校での職務等を聞き、教師を目指す心構えを確かにするとともに、目標をもつ。

平成２６年度　よこはま教師塾「アイ・カレッジ」シラバス（年間計画を抜粋）

回	月	日	曜	AMPM	講座名	講座のねらい
11	12月	20	土	ＡＭ	効果測定Ⅰ	○試問・論文（予定）
					効果測定Ⅰ	○試問・論文（予定）
				ＰＭ	教職教養基礎講座③ 言語活動を通した学力の育成	○思考力を育むために言語活動をどのように充実させればよいのか実践例をもとに考え、模擬授業等に生かす。
					コミュニケーション力向上講座⑤ Ⅰ期振り返り	○これまでの学びを振り返り、自己の課題を明らかにする。
12	1月	10	土	ＡＭ	横浜の教育の「いま」⑧ 横浜の教育の現状	○横浜市教育振興基本計画策定後の横浜市の学校の現状と今後の見通しについて知る。
					教職教養基礎講座④ スクールコンプライアンスからみた学校の教育活動のあり方	○スクールコンプライアンスの視点から学校の教育活動をみつめ、今、教師に何が求められているのか、今後教師が身に付けなければならない力について考える機会とする。
				ＰＭ	授業力基礎講座⑤ 指導案の基本的な事柄	○指導案を書くことの意義を理解する。 ○指導案の構造及び「基本の形」を理解する。
					授業力基礎講座⑥ 指導案作成についての協議	○持ち寄った指導案を、協議を通して「基本の形」にまとめ、指導案の書き方について理解を深める。
13	1月	17	土	ＡＭ	フィールドワーク 関内めぐりのねらいと進め方	○関内めぐりのねらいと進め方を知り、見通しをもつ。
					横浜の教育の「いま」⑨ 小中一貫教育	○小中一貫教育の推進や横浜版学習指導要領の策定等、横浜らしい教育の概要を知る。
				ＰＭ	授業力基礎講座⑦ 指導案作成	○模擬授業に向け、１時間の展開案を作成し、授業づくりのイメージをもって協議する。
					文章作成力養成講座③ 検討　具体的取組	○互いに文章を持ち寄り、構造や具体的方策に着目しながら検討し、自己の課題を明らかにする。
14	1月	24	土	ＡＭ	フィールドワーク 関内めぐり「開港と関内」	○フィールドワークを通して、地域材や歴史材の魅力や教育活動に生かす視点について理解を深める。
					フィールドワーク 関内めぐり「開港と関内」	○フィールドワークを通して、地域材や歴史材の魅力や教育活動に生かす視点について理解を深める。
				ＰＭ	フィールドワーク 関内めぐりⅡに向けて	○グループ協議を通して、横浜の魅力を伝える手法等について検討する。
					フィールドワーク 関内めぐりⅡに向けて	○グループ協議を通して、横浜の魅力を伝える手法等について検討する。
15	1月	31	土	ＡＭ	横浜の教育の「いま」⑩ いじめ・不登校に向き合う	○横浜で行われている不登校対策事業を知る。 ○不登校児童生徒への対応の基本を知る。
					教職教養基礎講座⑤ 養護教諭からみた児童生徒	○養護教諭の役割を知るとともに、子どもと共に過ごすために配慮しなければならないことについて考える。
				ＰＭ	授業力基礎講座⑧ 指導案検討	○資料を用いて指導案を作成するとともに、授業の見通しをもつ。 ○次回からの模擬授業の計画を立てる。
					文章作成力養成講座④ 検討　一貫した流れ	○互いに文章を持ち寄り、構造や一貫した流れに着目しながら検討し、自己の課題を明らかにする。

平成２６年度　よこはま教師塾「アイ・カレッジ」シラバス（年間計画を抜粋）

回	月	日	曜	AMPM	講座名	講座のねらい
16	2月	7	土	ＡＭ	フィールドワーク 横浜の魅力を伝えよう	○フィールドワーク等を通して、横浜の魅力を伝える。
					フィールドワーク 横浜の魅力を伝えよう	○フィールドワーク等を通して、横浜の魅力を伝える。
				ＰＭ	フィールドワーク 報告会	○フィールドワークを通した横浜理解やコミュニケーションの在り方について、互いの学びを共有する。
					横浜の教育の「いま」⑪ 特別支援教育の推進(2)	○個別支援学級について実践例をもとに理解を深める。
17	2月	14	土	ＡＭ	学校で学ぶ・学校と学ぶ 学校の実際	○学校見学や教職員等から話を聴くことで学校の実際を学ぶ。
					学校で学ぶ・学校と学ぶ 学校の実際	○学校見学や教職員等から話を聴くことで学校の実際を学ぶ。
				ＰＭ	授業力基礎講座⑨ 模擬授業	○指導案をもとに、模擬授業を行う。 ○協議を通して自己の課題を明らかにする。
					授業力基礎講座⑩ 模擬授業	○指導案をもとに、模擬授業を行う。 ○協議を通して自己の課題を明らかにする。
18	2月	21	土	ＡＭ	学校で学ぶ・学校と学ぶ 学校の実際	○学校見学や教職員等から話を聴くことで学校の実際を学ぶ。
					学校で学ぶ・学校と学ぶ 学校の実際	○学校見学や教職員等から話を聴くことで学校の実際を学ぶ。
				ＰＭ	授業力基礎講座⑪ 模擬授業	○指導案をもとに、模擬授業を行う。 ○協議を通して自己の課題を明らかにする。
					授業力基礎講座⑫ 模擬授業	○指導案をもとに、模擬授業を行う。 ○協議を通して自己の課題を明らかにする。
19	2月	28	土	ＡＭ	横浜の教育の「いま」⑫ 確かな学力	○確かな学力を育成するための横浜の施策等を知り、取り組みたい教育活動と結びつけて考える。
					教職教養基礎講座⑥ 国の教育動向	○これからの学校教育の方向性を学び、自ら実践したい教育活動とつなげて考え、模擬授業等に生かす。
				ＰＭ	学級経営基礎講座④ よい学級経営のポイント	○よい学級づくりのための指導のポイントや子どもをみる視野を広げる。
					コミュニケーション力向上講座⑥ 模擬授業	○良好なコミュニケーションを築くために、リフレーミング、アサーションなどの手法が有効であることを体験を通して理解する。
20	3月	7	土	ＡＭ	効果測定Ⅱ	○試問・論文・指導案作成（予定）
					効果測定Ⅱ	○試問・論文・指導案作成（予定）
				ＰＭ	文章作成力養成講座⑤ プロに学ぶ	○効果的な文章を作成するポイントを知り、自らの文章作成に生かす。
					コミュニケーション力向上講座⑦ ファシリテーター	○合意形成する際の望ましいコミュニケーションの在り方とファシリテーターの関わりについて体験的に理解する。

平成２６年度　よこはま教師塾「アイ・カレッジ」シラバス（年間計画を抜粋）

回	月	日	曜	AMPM	講座名	講座のねらい
21	3月	14	土	ＡＭ	教育課題対応力養成講座③ 場面対応(1)	○模擬面接を行い、課題場面における基本的な対応の仕方を身に付ける。
					教育課題対応力養成講座④ 場面対応(2)	○模擬面接を行い、課題場面における基本的な対応の仕方を身に付ける。
				ＰＭ	授業力基礎講座⑬ 学習指導向上のポイント	○課題を意識した教科指導案の作成のポイントについて理解を深める。 ○指導案検討を通して授業の見通しをもつ。
					授業力基礎講座⑭ 指導案作成	○資料等を用いながら、指導案を作成、検討する。授業づくりに関する自己の課題を明確にし、今後の目標を立てる。
22	3月	28	土	ＡＭ	文章作成力養成講座⑥ 課題に応じた文章作成	○文章作成と相互評価を行い、次の課題を明らかにする。
					横浜の教育の「いま」⑬ 横浜の英語教育	○横浜で実践されている英語教育について実践事例等をもとに理解を深める。
				ＰＭ	授業力基礎講座⑮ 模擬授業	○作成した指導案をもとにグループで模擬授業を行い、互いの授業実践力の向上を図る。
					コミュニケーション力向上講座⑧ Ⅱ期振り返り	○これまでの学びを振り返り、自己の課題を明らかにする。
23	4月	4	土	ＡＭ	社会人基礎力養成講座③ 学校で求められる振る舞い	○学校で求められる教員としての振る舞い（電話応対、懇談会等でのあいさつ、集団に向けての話し方等）について演習を通して身に付ける。
					学級経営基礎講座⑤ よりよい学級づくりアイデア	○持参したよりよい学級づくりのアイデアを協議し、実践したい具体的な事柄を明確にする。
				ＰＭ	授業力基礎講座⑯ 模擬授業	○作成した指導案をもとにグループで模擬授業を行い、互いの授業実践力の向上を図る。
					授業力基礎講座⑰ 模擬授業	○作成した指導案をもとにグループで模擬授業を行い、互いの授業実践力の向上を図る。
24	4月	11	土	ＡＭ	教育課題対応力養成講座⑤ 保護者等への対応(1)	○模擬保護者対応を行い、基本的な対応の仕方を身に付ける。
					教育課題対応力養成講座⑥ 保護者への対応(2)	○模擬保護者対応を行い、基本的な対応の仕方を身に付ける。
				ＰＭ	横浜の教育の「いま」⑭ 豊かな体験を通した学習	○豊かな体験を通した学習について実践例をもとに理解を深める。
					文章作成力養成講座⑦ 協議	○文章作成と相互評価を行い、次の課題を明らかにする。
25	4月	18	土	ＡＭ	横浜の教育の「いま」⑮ 接続期を考える。	○幼児教育－小学校教育－中学校教育の円滑な接続を目指した幼保小連携事業、小中一貫教育の概要を知る。
					横浜の教育の「いま」⑯ 地域と学校の連携	○学校の教育活動を高めるための地域と学校の連携のあり方について理解を深める。
				ＰＭ	授業力基礎講座⑱ 模擬授業	○作成した指導案をもとにグループで模擬授業を行い、互いの授業実践力の向上を図る。
					授業力基礎講座⑲ 模擬授業	○作成した指導案をもとにグループで模擬授業を行い、互いの授業実践力の向上を図る。

平成２６年度　よこはま教師塾「アイ・カレッジ」シラバス（年間計画を抜粋）

回	月	日	曜	AMPM	講座名	講座のねらい
26	4月	25	土	ＡＭ	教職教養基礎講座⑦ 学ぶ意欲を高める	○子どもが意欲的に学び続ける授業づくりのポイントについて学び、模擬授業等に生かす。
					横浜の教育の「いま」⑰ 授業づくり講座体験	○市内教職員が受講している授業づくり講座等、教員の力量向上の取組を体験を通して学ぶ。
				ＰＭ	教育課題対応力養成講座⑦ 場面模擬対応総合Ⅰ 文章作成	○場面模擬対応を通して、自己の表現方法について振り返り、課題を明確にする。
					教育課題対応力養成講座⑧ 場面模擬対応総合Ⅰ 文章作成	○場面模擬対応を通して、自己の表現方法について振り返り、課題を明確にする。
27	5月	9	土	ＡＭ	効果測定Ⅲ	○試問・論文・指導案作成（予定）
					効果測定Ⅲ	○試問・論文・指導案作成（予定）
				ＰＭ	学級経営基礎講座⑥ 「私が学級経営で大切にしてきたこと」	○よい学級づくりのための具体的な実践例を知る。
					社会人基礎力養成講座④ ことばセミナー	○相手にわかりやすく的確に話すポイントを理解する。情報の整理と話の組み立ての手法について実習を通して身に付ける。
28	5月	16	土	ＡＭ	横浜の教育の「いま」⑱ 服務・不祥事防止	○教員に求められる服務・規律について教育法規や実践事例をもとに理解を深める。
					授業力基礎講座⑳ 即興模擬の進め方	○即興模擬授業のねらいと進め方を知り、見通しをもつ。 ○導入時を意識した即興模擬授業を体験を通して課題をもつ。
				ＰＭ	教育課題対応力養成講座⑨ 児童生徒への対応(3)	○場面模擬対応を行い、基本的な対応の仕方を身に付ける。
					教育課題対応力養成講座⑩ 児童生徒への対応(4)	○場面模擬対応を行い、基本的な対応の仕方を身に付ける。
29	5月	23	土	ＡＭ	教職教養基礎講座⑧ 児童生徒指導のこれからの在り方	○子どもが意欲的に学び続ける授業づくりのポイントについて学び、模擬授業等に生かす。
					文章作成力養成講座⑩ 課題に応じた文章作成	○文章作成と相互評価を行い、次の課題を明らかにする。
				ＰＭ	授業力基礎講座21 即興模擬授業	○与えられたテーマに沿って即興の模擬授業を行い、授業力の向上を図る。（導入時を意識）
					授業力基礎講座22 即興模擬授業	○与えられたテーマに沿って即興の模擬授業を行い、授業力の向上を図る。（導入時を意識）
30	5月	30	土	ＡＭ	教職教養基礎講座⑨ 特別な支援を要する児童生徒	○特別な支援を要する児童生徒に接する際に配慮しなければならないことについて実践例をもとに考える。
					文章作成力養成講座⑪ 協議	○文章作成と相互評価を行い、次の課題を明らかにする。
				ＰＭ	授業力基礎講座23 即興模擬授業	○与えられたテーマに沿って即興の模擬授業を行い、授業力の向上を図る。
					授業力基礎講座24 即興模擬授業	○与えられたテーマに沿って即興の模擬授業を行い、授業力の向上を図る。

平成２６年度　よこはま教師塾「アイ・カレッジ」シラバス（年間計画を抜粋）

回	月	日	曜	AMPM	講座名	講座のねらい
31	6月	6	土	ＡＭ	社会人基礎力養成講座⑤ 社会人として求められること	○ホスピタリティの考え方を知り、子ども、保護者、同僚との関係づくりに生かす手法を演習を通して身に付ける。
					横浜の教育の「いま」⑲ 卒塾生に学ぶ	○卒塾生から学校での職務等を聞き、教師を目指す心構えを確かにするとともに、目標をもつ。
				ＰＭ	授業力基礎講座25 即興模擬授業	○与えられたテーマに沿って即興の模擬授業を行い、授業力の向上を図る。
					授業力基礎講座26 即興模擬授業	○与えられたテーマに沿って即興の模擬授業を行い、授業力の向上を図る。
32	6月	13	土	ＡＭ	教育課題対応力養成講座⑪ 場面対応(3)	○模擬面接を行い、課題場面における基本的な対応の仕方を身に付ける。
					教育課題対応力養成講座⑫ 場面対応(4)	○模擬面接を行い、課題場面における基本的な対応の仕方を身に付ける。
				ＰＭ	授業力基礎講座27 指導案作成	○課題を意識した指導案を作成し、学習指導案作成力の向上を図る。
					授業力基礎講座28 まとめ	○これまでの指導案作成、模擬授業等を振り返り、授業力向上の取組について成果と課題を明らかにする。
33	6月	20	土	ＡＭ	教職教養基礎講座⑩ データから考える初任者の特徴	○経験の浅い教員にみられる傾向を知り、採用時の心構えを確かなものにする。
					文章作成力養成講座⑭ 協議	○文章作成と相互評価を行い、次の課題を明らかにする。
				ＰＭ	横浜の教育の「いま」⑳ 横浜の安全教育	○学校における防災の考え方や取組を知る。
					コミュニケーション力向上講座⑨ Ⅲ期振り返り	○自らの求める教師像を伝え合う。自ら実践したい教育活動を確かなものにする。
34	6月	27	土	ＡＭ	卒塾式	○卒塾にあたり、教師を目指す志と信頼される教師としての使命感をもって教職に専念することの意味を確かめる。
					卒塾式	○卒塾にあたり、教師を目指す志と信頼される教師としての使命感をもって教職に専念することの意味を確かめる。

平成２４年度

よこはま教師塾「アイ・カレッジ」卒塾者についてのアンケート調査

平成27年3月

＜調査のお願い＞

貴校に在籍している平成２４年度よこはま教師塾「アイ・カレッジ」卒塾者（H２６年度初任者）について、現在の状況や子どもとの関わり方、指導力等、アイ・カレッジでの養成の効果についてアンケート調査を実施いたします。

お手数をおかけいたしますが御回答くださいますよう御協力をお願いします。

※必ず管理職が御記入ください。

※御提出の際はこのページも付けて提出してください。

＜回答例＞

【問1】　卒塾者の<u>仕事の状況</u>についてお聞きします。
次のそれぞれの項目について、もっともあてはまるものに
<u>1つずつ〇をつけて</u>ください。

＜よい例＞

		あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
1	子どもと適切なコミュニケーションをとることができる	(5)	4	3	2	1
2	様々な子どもたちに対応した学級経営が行えている	5	4	3	(2)	1

＜悪い例＞

1	子どもと適切なコミュニケーションをとることができる	5	4 ( )	3	2	1
2	様々な子どもたちに対応した学級経営が行えている	5	4	3	(2)	(1)

数字を囲んでいない

２つ〇が付いている

【学校名】

横浜市立　　学校

【卒塾者　氏名】

【卒塾者のH26年度の担当】（小・中学校のみ回答：〇を付けてください）

1　小学校低学年担任（　　年）　2　小学校中学年担任（　　年）　3　小学校高学年担任（　　年）

4　中学校担任（　　年）　5　中学校副担任（　　年）　6　個別支援学級担任

7　その他（少人数、専科、通級、教科等）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

【学校規模】（小・中学校のみ回答：〇を付けてください）

1　小規模校（小学校：11学級以下、中学校：8学級以下）

2　準小規模校（中学校：9～11学級）

3　適正規模校（小学校：12～24学級、中学校：12～24学級）

4　大規模校（小学校：25～30学級、中学校：25～30学級）

5　過大規模校（小学校：31学級以上、中学校：31学級以上）

【問１】卒塾者の<u>状況</u>についてお聞きします。
次のそれぞれの項目について、もっともあてはまるものに
<u>**1つずつ〇をつけて**</u>ください。

		あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
1	子どもと適切なコミュニケーションをとることができる	5	4	3	2	1
2	様々な子どもたちに対応した学級経営が行えている	5	4	3	2	1
3	子どもたちに前向きな気持ちをもたせることができる	5	4	3	2	1
4	子どもたちが困惑している時、別の分かりやすい説明や例を示すことができる	5	4	3	2	1
5	子どもたちに学級のルールを守らせることができる	5	4	3	2	1
6	学級の秩序を乱す子どもや、騒がしい子どもをうまく落ち着かせることができる	5	4	3	2	1
7	学業にあまり興味を見せない子どもに学習の動機付けを行うことができる	5	4	3	2	1
8	ねらいを明確にした授業を行うことができる	5	4	3	2	1

9	言葉遣いや音量が適切で、明るく表情豊かに授業を行うことができる	5	4	3	2	1
10	基本的な技能「発問・板書・ノートの取り方・機器を適切に使うなど」を身に付けている	5	4	3	2	1
11	教員として必要な基礎的・基本的な知識を身に付けている	5	4	3	2	1
12	指導展開の工夫をして、分かりやすい授業を行うことができる	5	4	3	2	1
13	子ども一人一人の反応を生かして授業を行うことができる	5	4	3	2	1
14	児童生徒の発言を適切に整理して、学びを促進したり考えをまとめたりできる	5	4	3	2	1
15	授業では多様な教授法や学習法を準備して実行することができる	5	4	3	2	1
16	授業において多様な評価方法を用い、主に指導に生かす評価を適切に行っている	5	4	3	2	1
17	家庭学習について適切に支援できる	5	4	3	2	1
18	保護者とコミュニケーションが取れている	5	4	3	2	1
19	保護者への対応ができている	5	4	3	2	1
20	保護者会で自分が行っている教育活動について、説明することができる	5	4	3	2	1
21	誤字脱字がなく、表記内容等、教師として適正な文章が書ける	5	4	3	2	1
22	地域の行事等に積極的に参加している	5	4	3	2	1

【問2】 卒塾者の**仕事に対する考え方・姿勢**についてうかがいます。それぞれの項目について、最もあてはまるものに**1つずつ○を**付けてください。

		あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
1	周囲の意見に耳を傾け、謙虚に学び続けようという姿勢が見られる	5	4	3	2	1
2	困難な問題にも積極的に関わっている	5	4	3	2	1
3	常に新しいことに挑戦している	5	4	3	2	1
4	様々な事を経験できる機会を求めている	5	4	3	2	1
5	教員としての力量を向上させようという姿勢が見られる	5	4	3	2	1
6	自分が経験したことについて振り返り、改善しようとしている	5	4	3	2	1
7	日々の教員生活における対応がうまくいったか、うまくいかなかったかについて、原因を考えている	5	4	3	2	1

8	様々な意見を求め、自分のやり方を見直している	5	4	3	2	1
9	過去の経験をもとに、自分なりのノウハウを見出している	5	4	3	2	1

【問3】 卒塾者の**職場への関わり**についてお聞きします。それぞれの項目について、最もあてはまるものに**1つずつ○を**付けてください。

		あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
1	同僚や先輩の話をよく聞き、誠実に対応している	5	4	3	2	1
2	自分から教職員に話しかけ、関係をつくろうとしている	5	4	3	2	1
3	全体のことを考え、できることを率先して行っている	5	4	3	2	1
4	教職員間の職務の円滑性が高まるような方法やアイデアを提案している	5	4	3	2	1
5	教職員集団の意欲が高まるような事を話している	5	4	3	2	1
6	他の教職員と仕事上の調整や分担がうまくいっている	5	4	3	2	1
7	教職員間の職務の効率性に役立っている	5	4	3	2	1
8	職場の創造性に貢献している	5	4	3	2	1
9	役割や課題に対して真摯な態度で取り組んでいる	5	4	3	2	1
10	職場の盛り上がりに貢献している	5	4	3	2	1
11	仕事上の時間や期日などを守っている	5	4	3	2	1
12	誰に対しても気持ちよい挨拶をしている	5	4	3	2	1
13	教員として、ふさわしい身だしなみをしている	5	4	3	2	1

よこはま教師塾「アイ・カレッジ」に御意見・御要望等ありましたら御記入ください。

以上で質問は終わりです。御協力ありがとうございました。

様式第１０（無断複製等禁止の標示）

本報告書は、文部科学省の初等中等教育等振興事業委託費による委託事業として、横浜市教育委員会が実施した平成２６年度「総合的な教師力向上のため調査研究事業」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。